
いつでもナイト

ささぐれタロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつでもナイト

【Nコード】

N1537H

【作者名】

ささぐれタロー

【あらすじ】

いつでもナイト。俺、中村直哉は、アイツ、竹原優途というお姫様のナイト。それなのに…。

プロローグ（前書き）

ナイトとか恥^づかしいわ。

プロローグ

「えーん、えーん」

誰だろう…記憶の隅に誰かが映る。凄くぼやけていて、よくわからない。

「なおよー…えーん、えーん」

聞き覚えのある甘い声。俺の名前を呼んでるのは、誰？

すると、もう一人誰かが映った。それはハッキリとされていて、よくわかった。

小さい頃の、俺。

小さい頃の俺は、もう一人の誰かの頬にキスをして、よく通る子供らしい声で

「オレがシカエシしてやるから、泣くな！そんな奴らに嫌われたって、オレがお前を好きだ！」

なんて不器用な言葉だろう。だけど、凄く凄く優しい言葉だ。

小さな俺は、言い終えると、どこかへ走っていった。そして…。

いつでもナイト

「ふぁ…あ…」

あんぐりと口を大きく開け、欠伸あくびをする。

ちゅんちゅんと、小さく小鳥ちゅんも囁ささやいていた。

「ふう…また、“あの夢”か」

俺は口を閉じ、呟いた。

“あの夢”。俺が初めて、あいつにキスをした時。

なぜこんな鮮明に覚えているのだろう。保育園の年少組。

周りの遊具さえ、ハッキリと見えている。のに、なぜアイツはぼやけているんだ。

眠そうな目をこすり、布団から足を出した。

それと同時に、ドアが開いた。

「おはよー。また、遅刻しちゃうよー？」

アイツだ。

俺の初恋の人。たけはら ゆうと竹原優途。

そして、俺の可愛い可愛い恋人だ。

プロローグ（後書き）

殴り書きでサーセンww

優途01（前書き）

二人の思いをそれぞれに書いていきます。
二人の気持ちのすれ違い。
それが書けたら幸いです。

優途 01

「おはよー、また今日も遅刻う？」

昨日同じ、一昨日と似たような言葉を皮肉そうに言う。

問いかけてる人物は、俺の…俺の、恋人。

なかむらなあや
中村直哉。

小さいときから仲良しで、小学5年生。ついに人に言えない関係になった、幼馴染。

はじめてあつてからずっと好きな人。

それなのに…。もう…。

「どうした？また、イジメられたのか？」

直哉は昔から不器用で、優しかった。

俺の髪を梳き、問いかける彼は凄く、凄く、頼もしかった。

「オレがシカエシしてやるからさ！泣くなよ！絶対！」

そう言つて、俺の頬にやわらかな口付けをする、そして。

虐めている奴らの元へ、駆けてつた。

最近よく見る夢。

直哉が、初めて俺にキスしてくれた夢。

目が覚めるために憂鬱になる。

だつて、もう…。

直哉を好きじゃないんだもん…。

あんなに大好きだったくせに。15年も付き合ってたのに。

それなのに。好きじゃあないんだ…。

心変わりじゃない。

直哉が悪いんだ、直哉が。

直哉はばたばたと忙しく着替えている。

「わりい！もう少し待って！」

せっかくお母さんが綺麗にしてくれた部屋が、パジャマや洋服で埋まってる。

ふう、と鼻で溜め息をつく。

見慣れた光景。中学の頃からずっとあわただ忙しい朝を送ってるよね。

直哉は着替えたのか、そそくさとスクールバッグを持って、ドアへ向かう。

「ごめんごめん！また、寝過ぎだった」

ふっくらと笑みを浮かべる。

日焼けした顔と対照的に、真っ白な歯がきらきら光る。

野球部の彼は、誰よりも野球と俺を愛す、人生野球&俺三昧男だ。

中学からはじめた野球なのに、自前の運動神経のよさで、野球の名門校。

吉良津谷高校きんづやにお呼びがかかった。

野球の名門校でありながら、進学の名門校でもあり。

どうしても直哉と一緒に高校に行きたかった俺からしては、受験は地獄だった。

普段勉強をしない俺だから、まるでフォークを使ったことない赤ん坊が反対に握っているような感じだった。

直哉は一般で300点あれば入れてあげるといわれてたから、受験勉強なんかせず、いつも俺の唇を奪って、押し倒した。

週末、勉強なんか30分ほどしかしてないのに、いつも朝帰りだった。

だけど、それほど直哉は俺のことを愛してるんだと嬉しかった。

それなのに今は…。

考えるのは止めた。

20センチも違う彼の頭を見るだけで、それだけで、精一杯だった。そうして、遅刻しそうなのにゆるゆると歩きながらも何十回もなぞった道に行く。

坂道にかかったところで、近くにある大きなサクラの木の陰でキスをされた。

情熱的なキス。

彼のキスはいつも激しくて、心はすぐ乾いた。
だけど今は、いつまでも心は乾いたままだった。

直哉 01

いつもの道。

何十回と通った、通学路。

途中で差し掛かる、坂道の側にある大きなサクラの下で、優途にキスをした。

激しく貪^{むさぼ}った。それぐらい、今は優途を欲しかった。

長いまつげがよりいっそう俺を熱くさせる。

今ココで、やりたいくらいだ。

だけどそれは堪えて…。ゆっくりと唇を離す。

「もうつ。急ぐよ！」

大きくて円^{つぶ}らな瞳が、真っ直ぐに見つめてくる。

身体が熱くなるのが解る。

桜色の唇を尖らしてるのも可愛い。

「解った解った」

俺たちは学校の校門まで走った。

ギリギリ遅刻はしなかった。

「あぢい…」

7月7日、晴れ。つい一週間前、例年にしては短い梅雨が終わった。じめじめした空から一気にカラッとした、高い空が広がり。

今日に関しては、入道雲が上へ上へと伸びていた。

そんな日の2時間目。

化学の授業。今日は実験室での授業で、実験室にはエアコンがついていなかった。

みんなブックサと文句をいいながら、作業を進めていた。

「ヤベーって…やる気でねえよお…」

小学校からの友達のカズちゃんという。

カズちゃんは、俺と優途との関係は知らない。

カズちゃんすら、俺たちの関係を知らない。

初めてアイツとキスしてから、なんどもなんども、キスをしたがった。

そして、ある日誰かにその場面を見られた。

その時は、まだ保育園児で善し悪しが解らないから、別に誰に見られても良かった。

だけどその子も優途のことを好きで、タコ唇をして優途に襲い掛かった。

俺がド突いて土にキスをさせたけど…。

そう言えば、その森口もりぐちがリーダー格になって優途を虐めてたな…。中学までホントシツコイ奴だったな。

そんな奴のせいで優途は人前でこうゆうことを公表しなくなかった。

誰にも言わないで、とすがんでくることもあった。

だから、カズちゃんですら知らない。

カズちゃんは、見た目すらはチャライけど、凄く凄く優しい。

だって、俺がこの高校入るといったとき、優途と同じで凄く凄く勉強してくれて、一緒に入ってくれたから…。

俺はカズちゃんになら言ってもいい気がした。カズちゃんなら、解ってくれると思った。

だけど、優途が嫌だからそんな事はカズちゃんの前でも絶対口には出さなかった。

それは、優途が嫌がるから…。俺は。俺は、優途のナイトだから…。俺はカズちゃんの言葉に全く同意だった。

「そうだよなあ…。どーせなら、全部の部屋にクーラーつけりゃ良かったのに…」

「ほんと、ほんと。なんで廊下にもクーラー付いてるくせに、美術室と実験室にはクーラー付いてないんだよって感じ」

またもやカズちゃんの言葉に同意する。美術室の夏は地獄だ。去年、高1の時地獄を味わった。

俺は初めて地獄を味わったと思った。あんなところで絵がかけるか！

そんな、自分が沸点きそうなくらい暑かった実験室での実験も終わり、昼食の時間になった。

俺は隣のクラスの優途を呼んだ。

優途は誰かと話していた。が、すぐに駆け寄ってくれた。

こんなとき、俺は本当に優途と付き合ってるんだなと実感し、幸せになる。

俺と優途とカズちゃんは、屋上で食うことにした。

ああ、こういうのが幸せだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1537h/>

いつでもナイト

2010年10月28日06時58分発行